

敗戦忌烟の闇を見てをりぬ

二十五回生 牧村 佳那子
(山崎)

戦争のことはあまり記憶がありません。宝塚の近く(と聞いています)服部という田舎、畑や田圃がひろがっていたと思います。

そこで生まれ、五歳まで暮らしました。そのあと吹田の操車場の近くに一年、そして千里山に越しました。服部にいる時には、私は伯母(後藤綾子氏)千里山後藤歯科医院の女医先生 俳句の世界では高名な方です。そのころいっしょに済んでおられました。編集部注)と手をつないで防空壕に逃げこんだのはおぼえています。

防空壕から出た時、真っ赤な火の空を多勢の人達とみた記憶があります。大人達は「尼ヶ崎や、尼ヶ崎や」と言っていました。

母は弟をおぶい、妹と私の手をひいて、『おじや』の配給にずっと並んで待っていたのに「ここで終わりです!」と云われ、前の人で『おじや』がなくなってしまうた。「なさげなくてね」という話を何度もしていました。

お腹がすいて、すいてと思ったことはありません。

今になって、母や伯母達はどんなふうの子供三人に食べさせてくれたのかと思います。

「音たてて銀の紙降る春の夢」という句は、かすかに目に(もしかしたら頭に)残っている戦争の記憶だと思っています。

銀紙がキラキラひかりながら空からたくさん降ってきました。細長い、リボンのような感じですよ。

でも本当に銀紙だったのか、白い紙に太陽がきらきらとあたっていたのかわかりません。ただこわくて、こわくて・・・とおぼえています。

冒頭の句は、俳句にするようになってから、『春の夢』してしまっただけです。

おわり